

Ocean Newsletter

5 December 2024

NO. 584

フェロー諸島:その特徴と国際関係、日本との絆

Høgni HOYDAL

フェロー諸島は北大西洋にある群島で、起伏に富んだ景観と豊かな海洋資源、ヴァイキングの遺産で知られ、特に安全保障と気候変動の観点から、北大西洋において戦略的位置を占めている。

フェロー諸島は日本とは持続可能な資源管理における結びつきをもっている。

小さな島国だが、豊かな海洋資源をもつフェロー諸島は、気候変動や安全保障、経済発展という課題を切り抜けるためにも国際協力に貢献していく考えだ。

地域あつての地域捕鯨

～フェロー諸島のキリスト教化と相互扶助～

赤嶺淳 ● AKAMINE Jun

北大西洋のフェロー諸島では、捕鯨専門家が存在せず、住民が自主的に参加する「地域捕鯨」(コミュナル捕鯨)が行われている。ヒレナガゴンドウを対象とする、この捕鯨は9世紀にノース人が導入したのと考えられている。

300年以上にわたり、詳細な記録をたどれる、世界でも希な捕鯨である。

鯨肉は無償で島民に分配され、孤島に暮らすフェロー諸島人の食生活の重要な一部となっている。

この捕鯨は、地域社会全体を覆う相互扶助の精神に根ざしており、キリスト教とともに人びとのアイデンティティと結びついている。

崖の島・フェロー諸島

岡田なづな ● OKADA Nazuna

北大西洋に浮かぶフェロー諸島は、ダイナミックな自然が作り上げた唯一無二の景観で訪れる人々を魅了し続けている。

その美しい景観以上に筆者をひきつけたのは、人々の自然との向き合い方である。

ごく一部ではあるが、滞在中に垣間見たフェロー諸島の人々の日常を紹介したい。

フェロー諸島:その特徴と国際関係、日本との絆

[KEYWORDS] 北極圏／海洋安全保障／海洋資源

Høgni HOYDAL ●フェロー諸島自治政府副首相兼外務・産業・貿易相

フェロー諸島と国際社会

フェロー諸島は北大西洋にある群島で、起伏に富んだ景観と豊かな海洋資源、ヴァイキングの遺産で知られています。陸地面積は合わせて約1,400km²の18の島々からなるフェロー諸島は、その200海里排他的経済水域のゆえに、海洋で大きな存在感を持っています。この広大な水域がフェロー諸島の経済と文化、アイデンティティの中心です。フェロー諸島の人口は5万5,000人、古ノルド語から派生したフェロー語を話し、デンマーク王国内で高度な自治権を享受しています。

フェロー諸島は、特に安全保障と気候変動の観点から、北大西洋において戦略的位置を占めています。フェロー諸島は冷たい北極海の水と温かい大西洋の水が交わる重要な地点にあり、海洋生物にとって豊かな環境となっています。この合流点は地球全体の海流と気候調節にとって極めて重要です。気候変動のためにこの自然の「ポンプ」に何らかの支障が出れば、北極圏全体、そしてそれを越えた地域まで、広範囲に及ぶ影響を与えかねません。

フェロー諸島はまた、安全保障の点でも戦略的に重要です。海戦上のチョークポイント(戦略上重要な海上水路)であるGIUK(グリーンランド、アイスランド、英国)ギャップは、北大西洋の海洋交通を監視・管制するうえで非常に重要です。現在の地政学的緊張を考えると、NATO(北大西洋条約機構)とその同盟国にとって、フェロー諸島の位置は重要性を増していると言えます。

小さなフェロー諸島ですが、地球規模の課題に取り組むさまざまな国際フォーラムに積極的に参加しています。ブリュッセルやコペンハーゲン、ロンドン、レイキャビク、モスクワ、北京、テルアビブ、ワシントンなどの主要都市に外交代表部を置いています。私たちは、特に海洋管理や気候変動、安全保障に関する国際法や国際条約の順守を約束しています。EU(欧州連合)には加わらず、独自の貿易協定および漁業協定を維持するという私たちの決断は、自分たちで海洋資源を管理し、グローバルな問題に独立して関与するという決意を明確に示しています。

フェロー諸島と日本:歴史的・文化的な結びつきと経済協力

フェロー諸島と日本の関係は、相互尊重と、特に海洋政策や持続可能な資源管理における島国としての利害の共有を特徴としています。両者共に海洋に関わる強力な伝統と海との深いつながりを持っています。私たちは北極評議会における日本のオブザーバーとしての役割と、小型鯨類を含む海洋資源の持続可能な利用にフォーカスする北大西洋海産哺乳動物委員会(NAMMCO)への参加を評価しています。

文化面においても、さまざまな取り組みを通じて、フェロー諸島は日本との結びつきを強めようとしてきました。例えば、映画の上映やフェロー語日本語辞典の作成などの文化交流は、両国民間のコミュニケーションや理解を促進してきました。経済面では、フェロー諸島は日本との貿易関係の拡大を熱望しています。フェロー諸島経済は海洋資源に大きく依存しており、輸出額の約90%を魚類および水産養殖製品が占めています。フェロー諸島は高品質の魚介類で知られ、特にサーモンは世界でも指折りの最高級品だと自負しています。より緊密な経済関係の強化によって、フェロー諸島も日本も、貿易の拡大や海洋研究および持続可能な活動における協力から利益を得ることが

■地図：フェロー諸島 (Faroe Islands)



(出典：フェロー諸島自治政府サイト <https://www.faroeislands.fo/the-big-picture>)

できます。

フェロー諸島と日本は既に、研究と教育、文化、観光、貿易、気候変動に重点を置いた「協力覚書」に署名しています。この合意は、二者の関係を一層強化し、協力の新たな機会を探るための具体的な道筋を生み出す枠組みを設定するものです。

持続可能な開発と課題：海洋資源の管理、観光、環境保護

海洋資源の持続可能な管理は、フェロー諸島の経済および環境政策の基盤です。フェロー諸島には漁業と捕鯨の長い伝統があり、これらの活動は私たちの文化と経済に深く根付いています。私たちはこうした活動が持続可能で海洋生態系に害を与えないものであることを保証するために、科学的データと国際協力が重要だと強調しています。

フェロー人の捕鯨手法、特にゴンドウクジラ漁は、しばしば国際的な論争の的となります。しかし、私たちはこの漁が、環境への影響を最小限に抑えながら必要な資源を供給するもので、持続可能だと擁護しています。商業取引を行わず、漁獲物を地域社会で分けるフェロー諸島の捕鯨法は、持続可能な資源利用のモデルです。

観光はフェロー諸島経済の新興部門であり、現在は輸出額の約6%を占めています。フェロー諸島は手つかずの自然が残る秘境として宣伝されており、エコツーリストや冒険を求める人々だけでなく、ユニークな逃避先を求める大都会からの旅行者にもアピールしています。しかし一方で、観光客の流入は、脆弱な自然環境や地域社会に課題を突き付けてもいます。こうした課題に対処するため、フェロー諸島議会は「持続可能な観光に関する法律」を採択しました。この法律は地域社会に観光客の数を規制する権限を与えるもので、観光開発が環境保全や文化保護とうまく釣り合いを取れるようにするものです。観光によって得られた収益は、自然保護と地域社会支援に再投資され、持続可能で再生型の観光産業の創出を目指します。

国際協力の重要性

フェロー諸島は人口も国土も小さいかもしれませんが、その立地と広大な海洋領域、豊かな海洋資源、国際協力への貢献のために、国際舞台で果たす役割は重大です。フェロー諸島と日本の関係は、距離的には遠く離れていても同じような課題に直面する島国同士が、持続可能な資源管理や文化交流などの共通の利益のためにどのように協力できるかを示す好例です。気候変動や安全保障、経済発展という課題を切り抜けるために、フェロー諸島は国際協力の重要性を引き続き強調していきます。そこには、日本のような国との関係強化も含まれているのです。(了)

地域あつての地域捕鯨

～フェロー諸島のキリスト教化と相互扶助～

[KEYWORDS] ヒレナガゴンドウ／ノルディック海域／コミュニタス

赤嶺淳 ● 一橋大学大学院社会学研究科教授

フェロー諸島への期待

2024年7月、1週間弱の滞在ながらも、念願のフェロー諸島を訪れる機会をえた。その目的は、ヒレナガゴンドウ漁の現場に立ちあうことだった。残念ながら、その達成は次回までおあずけとなったが、わたしが体得したフェロー諸島における捕鯨を紹介したい。

ノルウェーからアイスランドを経てグリーンランドにいたる北大西洋（ノルディック海域）では、IWC（国際捕鯨委員会）が定める商業捕鯨（ノルウェー、アイスランド）と先住民生存捕鯨（グリーンランド）にくわえ、フェロー諸島で地域捕鯨がおこなわれている。その対象はIWCの管轄外にあるヒレナガゴンドウ（以下、ゴンドウ）である。興味深いのは、①フェロー諸島には捕鯨を職業とする者が存在せず、島びとが自主的に参加していること、②その生産物（肉と脂皮）が無償で分配され、自家消費されていることである。

商業捕鯨・生存捕鯨・地域捕鯨という3タイプの捕鯨が併存するノルディック海域における捕鯨の多様性に着目することで、捕鯨問題を解決にみちびく鍵を見いだすことができるのではないかな？
そうした期待がフェロー諸島の訪問を念じてきた根幹的理由である。

ゴンドウ漁の歴史

フェロー諸島における捕鯨の起源はあきらかではない。9世紀にスカンジナビア半島から入植したノース人が導入したヴァイキングの慣習のようである。すでに1298年には寄り鯨の所有権について言及した文書が編まれている。これは当時、フェロー諸島を統治していたノルウェーの慣習法が適用されたものらしい。1584年から統計がみとめられるが、残念なことに1641年から1708年までの記録が欠如している。しかし、逆にいえば、1709年から現在まで、300年以上にわたって詳細な記録がのこっているわけである。そんな事例は世界に例がない。

その統計によれば、1709年から2017年までの308年間に257,886頭が捕獲された。平均して年間に811頭が捕獲され、439トンの肉と脂皮が生産されている（以下、鯨肉に脂皮もふくむ）。現在の人口を5万人と仮定すれば、国民ひとりあたり8,780グラムの鯨肉を年間に消費する計算となる。2017年の国民ひとりあたりの鯨肉消費量はノルウェーが76.9グラム、日本が25.9グラムである。フェロー諸島の食生活が、みずからが生産する鯨肉に依存していることがわかる。同諸島出身の歴史学者ヨアン・パウリ・ヨエンセン（Joan Pauli Joensen）は、著書『フェロー諸島におけるゴンドウ漁——歴史・民族誌・象徴』（フェロー大学出版会、2009年）で、鯨肉はフェロー諸島で消費される肉類の20～30パーセントに相当すると推計しているけれども、あながち誇張した数字ではないだろう。しかも、この推計は現在のものである。300年前の人口が数千人だったとすれば、鯨肉への依存度は、かなりなものであったはずだ。

ゴンドウ漁の実際

フェロー諸島には、ゴンドウ漁の専従者はいない。熟練度のちがいはあろうとも、一連の操業は、いわば「素人」集団によっておこなわれている。沖合の群れを発見した人は、地区長官（シェリフ）

に連絡することが義務づけられている。ソナーで位置を確認するゴンドウを追い込むためには、遠浅の浜(ビーチ)が欠かせない。しかし、氷河が削りとったフィヨルドに囲まれたフェロー諸島には、そうしたビーチは限定的である。現在は23箇所が政府によって追い込み可能な場所として指定されている。発見場所から群れを割らずに指定されたビーチまでゴンドウを追い込めるか否かは、ビーチまでの距離にくわえ、潮の方向や強弱、干満、風向や風速などによってくる。暗すぎても危険である。群れの大きさも重要なポイントとなる。したがって群れの発見が、そのまま捕獲につながるわけではない。最終的に追い込みの可否を決定するのは、シェリフと4名の捕鯨監督人である。実際、さきの統計では、追い込んだ平均実績は1年に6回にすぎない(1回あたりの捕獲は135頭)。

ゴンドウを捕獲するには、追い込まれてきたゴンドウを波打ち際で捕殺する人びとや息絶えて海底に沈んだゴンドウを砂浜に引きあげる人びとが不可欠である。偶発性に左右される発見はもちろんのこと、捕殺にいたるまでの一連の作業は、決して数人でおこなえることではない。地域(community)全体でなされるべき事業なのである。そのことは、年老いた人や健康にすぐれない人など、漁に参加したくとも、さまざまな事情で参加できない人へも、一定の鯨肉が分配される仕組みが明文化されていることにも顕著である。



©Nazuna Okada

ヒレナゴンドウの追い込み漁の最終場面(岡田なづな氏提供)

ヨーロッパ世界のなかの地域捕鯨

フェロー諸島の捕鯨を分類する「地域捕鯨」(communal whaling)とは、わたしの造語である。英語文献ではcommunity-basedと形容されるのが一般的である。communalだろうと、community-basedであろうと、どちらも「地域」と訳さざるをえないのは、両者がともにラテン語のcommunitas(com共に+munis義務)を語源とし、「共同」性を含意するからである。しかし、その相違は後者が文字どおり「地域社会に根ざした」ことに力点をおくのに対し、前者は集団が資源を「共有」することに着眼する点にある。ゴンドウ漁への参加の有無に関係なく希望者に無償分配される相互扶助の精神こそ、「コミユナル」と呼ぶにふさわしい。

しかし、このコミユナル性は天賦のものではなく、人びとが勝ちとってきたものである。国王や宮廷官僚などの地主に生産物の4分の3を納めるのを常とした悪弊は、1832年以降に段階的に改善されていった。先述したヨエンセンは、その背景として18世紀後半にヨーロッパを席卷した啓蒙思想とフランス革命の余波が絶対王権を弱体化させたことを指摘している。また、世界遺産とも賞賛すべき300年超の統計が残されているのも、そもそもは税金として生産物の一部が教会に納められていたからである。

ゴンドウ漁はフェロー諸島人のアイデンティティの源泉である。その深層には、キリスト教化はもちろんのこと、ノルウェーやデンマークの支配を乗り越えてきた歴史が横たわっている。亜北極圏という過酷な環境下にあるフェロー諸島の地域捕鯨を理解するためには、同諸島を包摂する世界を捉えなくてはならない所以である。

世界各地で、それぞれの地域が歩んできた歴史にもとづいて異なる鯨種が多様に利用されてきたわけである。そうした単純な事実にあたちかえることが、膠着した捕鯨問題を解決する糸口になるのではなかろうか。(了)

※ 本研究は、文部科学省「北極域研究加速プロジェクト——新たな北極域研究をめざして」(ArCSII: Arctic Challenge for Sustainability II)の社会文化課題(温暖化する北極域から見るエネルギー資源と食に関わる人間の安全保障、代表高倉浩樹・東北大学教授)によっています。

崖の島・フェロー諸島

[KEYWORDS] 亜北極圏／島嶼／自治領

岡田なづな ●元 北極域研究共同推進拠点 (J-ARK Net) 研究協力者

北大西洋に浮かぶ島

フェロー諸島は独立国ではない。デンマークの自治領でありながら、独自の国旗、国会、言語（フェロー語）を有する。日本からは、飛行機でデンマークのコペンハーゲンを経由して約16時間、デンマークのヒアツハルスから出航するフェリーでは、約30時間で到着する。人口は約55,000人で、約14,000人が暮らす首都トースハウンは、徒歩でも十分生活できるほどこじんまりとした町である。

踊る人々を見て

クラクスヴィークは、トースハウンにつづいて2番目に大きな町で、漁業がさかんである。毎年8月に行われる、漁業や海への関心を高める目的のイベントでは、魚介類を使ったさまざまな料理が無料で振る舞われ、子どもたちが魚やカニなどと触れ合えるコーナーも設けられている。隣には、イベントの少し前に捕れたというヒレナガゴンドウが数頭よこたわっており、漁における正しい捕殺や解体の方法が解説されている。

2012年8月に初めてこのイベントを訪れた時、印象的な場面を目にした。ヒレナガゴンドウの解説が終わりしばらくすると、突然10人ほどの人々が腕を組んで輪になり、歌いながら左右にステップを踏み始めた。1人、2人と輪に混ざり、輪はどんどん大きくなる。関係者らしき人に、催しの1つか尋ねると、これは「チェーンダンス」というフェロー諸島の伝統的な踊りで、おそらく誰かが勝手に踊り始めたのだろうという。まるで予告されていたかのごく自然に輪に混ざる人々を見て、なんと結びつきの強い人々だろうと驚嘆し、フェロー諸島の人々に対してより深く関心を寄せるようになった。

絶海の島

フェロー諸島の景観を一言で例えるならば、「ゲレンデ」だろうか。春から秋はそり遊びをする芝生のゲレンデ、冬は雪が積もったスキー場が、横に長く果てしなく続いているイメージであるが、実際には、そりやスキーどころではない場所がほとんどである。友人が放牧するヒツジの追い込みに同行したり、ハイキングに行ったりしたことがあるが、急な斜面と雨に濡れた草地を、転がり落ちないように歩くのは至難の業で、ごつごつとした険しい岩がむきだしになった道は友人の手助けなしには進めなかった。一方フェロー諸島で生まれ育った友人らは、滑りやすい急斜面も険しい岩場も難なく歩いていた。

そびえ立つ垂直の崖、鋭く切り立った尾根、入り組んだフィヨルド、島と島を隔てる海峡、深い谷とその間を流れる川など、美しく、荒々しさも感じさせる絶海の島の大自然。起伏が激しく、海岸線のほとんどが崖になっている島を、上空や海上から眺めると、人々は一体どのように暮らしているのだろうと案じてしまうが、島中を張り巡る道路や数々のトンネル、限られた平地や傾斜の緩やかな場所に集まる、色とりどりの家々を見ると、安堵のような、温かい気持ちになる。

起伏に富んだ地形のため、電車は走っておらず、公共交通機関はバス、フェリー、ヘリコプターが運行している。大小18の島々から成るフェロー諸島において、島から島へ海を渡る移動は日常的に欠かせない。特にヘリコプターは離島に暮らす人々にとって重要な交通手段であるため、フェ

ロー諸島に居住する人の料金は、非居住者の3分の1の価格に設定され、居住者が定期的にヘリコプターを利用できるよう配慮されている。

フェロー諸島の各地を訪ねて驚いたのは、トンネルの数の多さである。現在20カ所が稼働中で、うち4カ所は島と島を結ぶ海底トンネルである。トンネルは、歩道や地形上の問題で通行が困難な道やフェリーやヘリコプターの運行ルートに取って代わる手段となっており、現在も建設中や計画段階のものが多数ある。



ヘリコプターから撮影したクラクスヴィーク上空（撮影：筆者）

フェロー諸島の気候と景観

北緯62度の亜北極圏に位置する地域としては、フェロー諸島の気候は比較的穏やかである。平均気温は、最も高い7月と8月で11℃、最も低い1月で4℃と年較差はそれほど大きくない。年間を通して空は厚い雲に覆われ、多湿で風が強く、雨が降りやすい。「1日で四季を体験できる」と言われるほど天気が変わりやすく、雨の中バスに乗っていて、トンネルを抜けると雲間から日が差し、ほどなくして虹が出るということを経験したこともある。夏は20℃前後まで気温が上がり、晴れ間が出ることもあり、人々は釣りやセーリングを楽しんだり、テラスでの食事などで日光浴をしたりと短い夏を充実させる。冬は日常生活に支障をきたすほどの豪雪地帯ではないが、家から出られないほどの荒天になることはしばしばあるらしい。

春から秋の景観は一見すると「緑」に見えるが、木はほとんど生えていない。緑の景観を作り出しているのは、主に草地や苔、地衣類である。強風や低い気温、そして冬に発生しやすい暴風雨などにより、植物の生育に不向きな地域である。背の高い植物は強風で倒れてしまうため栽培が難しく、家庭菜園で栽培できるのはジャガイモやルバーブなどくらいだという。

一方で、豊富な草地はヒツジを放牧するのに役立っている。島の人口が約55,000人であるのに対し、約7万頭のヒツジが放牧されている。島のいたるところで、急な斜面を歩き、草を食む姿は景観の一部となっている。広大な草地を自由に移動するヒツジの肉は質が高く、また強風により海水が吹きつける草を食むため塩味が感じられ、格別らしい。畜産農家から羊肉を1年分まとめて購入したり、ヒツジを小規模に放牧したりする家庭もある。

自然とともに生きる

フェロー諸島では、島のどこの地点でも海岸線から5km以上離れることがない。海は日常の風景の一部となっていて、窓から海を臨む家が多い。フェロー諸島の人々との会話では海に関する話題がよく出る。仲間と釣りに行って4時間でタラを80匹釣った、家の窓から見える隣の島までボートで行った、海が穏やかだから今から家族でセーリングに行くなどである。クジラ漁の情報も、島民同士のやりとりを中心に広まる。

フェロー諸島のクジラ漁では、積極的にクジラを探すことはしない。誰かがクジラを発見することで、偶発的に起こる。いつどこで起こるか予測がつかないのにもかかわらず、漁には多くの島民が駆けつける。クジラを、波打ち際まで追い込む、捕殺する、港へ運搬する、並べる、解体・分配する、調理・保存のための下処理をする…鯨肉が食卓に上がるまでの工程はどれもハードな作業である。そうして得た鯨肉を、漁に参加できない高齢者などに分け与える人も少なくない。

フェロー諸島の人々にとって、食料を自ら獲得することごく日常的な営みである。狩猟に関する制度や規制を深く理解し、必要な分だけ捕るように心がけたり、生き物の種類や習性に精通していたり、島の気象を熟知していたり、捕った魚や海鳥やクジラの下処理や長期保存の準備を手際よくこなしたりと、島民にとっては当然のことかもしれないが、そういった場面に遭遇するたびに、長年培われてきたフェロー諸島の人々の自然との向き合い方を垣間見ることができたように感じる。（了）



事務局だより

◆長年にわたり世界幸福度レポートで上位にランクインしている^{*1}デンマーク王国のことについて、多くの方が幼少期に読んでいたアンデルセンの童話や、没頭して遊んでいたレゴのおもちゃを通じて知っていたと思いますが、そのデンマーク王国の自治領であるフェロー諸島は、馴染みの薄い地域であるかもしれません。フェロー諸島は近年では順調な経済発展を遂げ、1人当たりのGDPも6万ドルを超え^{*2}、自然豊かで風光明媚、サケをはじめとする水産物も豊富で大変豊かな地域であると言えます。今号は国際関係と文化歴史の観点からフェロー諸島の特徴を垣間見ることができるのではないのでしょうか。◆フェロー諸島自治政府副首相兼外務・産業・貿易相でいらっしゃるホイダル氏のご寄稿で紹介しているように、フェロー諸島が日本とのつながりの緊密さを増しています。2022年には「日本政府とフェロー諸島政府との間の協力覚書」が締結されるなど、捕鯨・北極等の分野で具体的な取り組みが進められています^{*3}。また、政府レベルの連携に先駆けて、2018年1月に和歌山県太地町とフェロー諸島第二の町であるクラクスビークとの姉妹都市提携が締結されるなど、あらゆるレベルでの連携強化が加速しつつあると言えます。◆鯨と言えば、直接に目の当たりにする経験はないのですが、何年か前に農林水産省の食堂「手しごと屋 咲くら」のクジラステーキ定食に舌鼓を打った記憶があります。同様に赤嶺氏のご寄稿で紹介した商業捕鯨や生存捕鯨と違う活動の理念や手法をとっているフェロー諸島の地域捕鯨の特徴も印象深いものです。「素人」が偶発的に発見したクジラを地域全体で捕獲に取り掛かり、無償で地域住民の全員に分配する Gondou 漁の慣習の裏にはフェロー諸島住民が持っている伝統的な生態学知識や現地の漁業文化が表れています。赤嶺氏が指摘しているように、このような地域が持つノウハウが捕鯨問題解決の議論に不可欠であろうと思いました。◆筆者は2023年10月に16th Polar Law Symposiumに参加するために、フェロー諸島の首都トースハウンにお邪魔したことがあります。岡田氏のご寄稿を拝読しながら、フェロー諸島の豊かな自然が再び目に浮かびます。逍遙自在に散歩する羊たちやカラフルな屋根の家は所々で点在しています。どこに行っても温かみのあるピースフルな町です。トースハウンに行く機会があれば、車ではなく、散歩がてらでフェロー諸島の現地文化を味わいながら町中を歩いてみることをお勧めします。

(主任研究員 高翔)

※1 デンマーク王国駐日大使館
<https://japan.um.dk/ja/about-us/press/the-kingdom-of-denmark>
※2 Faroe Islands: the World Factbook
<https://www.cia.gov/the-world-factbook/countries/faroe-islands/>
※3 協力覚書署名式: 外務省HP
https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/we/dk/page4_005557.html

みなさまのご意見をお待ちしております。

『Ocean Newsletter』は、読者のみなさまからのご意見を歓迎いたします。鋭い現状分析、創造的なご意見、積極的な問題提起や政策提言などを求めます。頂戴したご意見・原稿は、編集会議で拝読のうえ、編集に反映させて参ります。

ご提出は、電子メールまたはFAXでお願い致します。

E-mail : oceannewsletter@spf.or.jp

FAX: 03-5157-5230

詳細は、本財団ウェブサイトをご参照下さい。

『Ocean Newsletter』 次号No.585は、12月20日発行です。

下記URLにご登録いただきますと、
発行日にメール配信いたします。

https://www.spf.org/opri/newsletter/mail_magazine/

●OPRI情報発信アドバイザーボード(50音順)

秋道智彌

(海洋人類学)
山梨県立富士山世界遺産センター所長

飯田将司

(中国外交・安全保障)
防衛研究所理論研究部長

北村喜宣

(環境法)
上智大学法学部教授

佐藤慎司

(海洋工学・沿岸環境)
高知工科大学大学院工学研究科長

庄司るり

(航海学)
(国研)海上・港湾・航空技術研究所理事長

鈴木英之

(船舶海洋工学)
東京大学大学院工学系研究科教授

高井研

(地球微生物学)
(国研)海洋研究開発機構超先鋭研究開発部門部門長

瀧澤美奈子

日本科学技術ジャーナリスト会議副会長

竹田有里

環境ジャーナリスト、報道記者

西本健太郎

(国際法)
東北大学大学院法学研究科教授

宮原正典

よろず水産相談室afc.masaf代表

山形俊男

(海洋物理学・気候力学)
(国研)海洋研究開発機構アプリケーションラボ特任上席研究員

山下東子

(水産経済学)
大東文化大学経済学部特任教授

早稲田卓爾

(海洋技術環境学)
東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

●発行人／編集代表

角南篤 公益財団法人笹川平和財団理事長

●発行

公益財団法人笹川平和財団 海洋政策研究所

〒105-8524

東京都港区虎ノ門1-15-16笹川平和財団ビル6階

TEL. 03-5157-5210 / FAX. 03-5157-5230

OPRI 海洋政策研究所

●●●●●●●● SASAKAWA PEACE FOUNDATION

Ocean Newsletter No.584

2024年12月5日発行(毎月5日・20日発行)

©2024 Ocean Policy Research Institute, The Sasakawa Peace Foundation

製作:(有)プレインワークス